共古日錄 二十八

特別
15
1413
26

門 15
號 1413
卷 26

元明御陵に就て

元明元女の合葬石碑に就ては藤貞幹の著
書に載せてあるが猶ほ遺漏多きを以て
茲に再び之を記す

元明天皇陵碑

元明天皇陵碑石麗字殆ど滅盡不可
讀況んや其御陵人跡生絶
佛耳楷法古雅雄健古
碑北石之為陵碑冠
三碑不待辭而識生讀生或並

云陵中誌石未知何據陵上文有刻人身獸面像
石九三世祈年人像古雅可玩云況搨得其一
圖拼之装飾
とぞせり無識生の模刻とみるものは即ち貞幹の模刻と
同一のものか又は別のものか未だ其点は審にしたるもの
実見の上ならでは何とも記せん
蔵春閣主人なる者の編せし写本皇朝金石編巻
之四に極斗の貞幹偽造説を出して云へるは無説
截然と記せり
山田孝雄なるもの編せし 大正六年十二月印刷 古京遺文の續くに

も極斗の説を引いて云く「云々されと東大寺要録の後冬
十二月發酉撥とありて朔字なし未た遂に貞幹
を疑ふべからず而して拓本の同擊せるもののうち
最も古くして原拓なるんと思はるるものをとりて後の
考覈に供したり」と記して拓本の写さし石板縮図
せられたり無拓なりしが文字讀み得ざるもの僅に
二三字貞幹奈保山御遠碑考証すら記せしが文
字剝落讀得べからざるもの二十字まで過ぎずと云へる正反對
なり貞幹これを記せしは明和七年十一月なれば無拓

富士川游さの
氏伊勢参宮之
祈祷奉願候

アブラカダブラ

ABRACADABRA
BRACADABR
RACADAB
ACADA
CAD
A

獨逸ニ行ハル、護符ノ一ツ

SATOR
AREPO
TENET
OPERA
ROTAS

意味ハ今ハ解ケ去レルガ一説ニハ下ノ如キ意味アリトイフ

熱病ノ護符

Sator jadhan
Apec = orabu
Tenb = kennede
ope = obeca
u = vono
Rotas = Rodda

Nen - keet
nach Rebl

東京高名
板書人の名
なるべきもの

東京高名人の書
銀座の伽羅
古梅園 日二店の先祖
松井 の書
紙高所うるや
竹葉亭 成教大域書
白木屋呉服二店
銀座壱番三河水
岡鉄舟書
萬紙細工所

同十八日の夜高崎町の一部一部の戸数一千五百十七戸を焼失す
同廿一日午前十時来る
同月廿二日午後一時越後屋より出火魚河岸迄類焼東横の町々を焼
同廿三日午後四時頃より雨降り来る
同廿四日午後一時頃より雨降り来る
同廿五日午後一時頃より雨降り来る
同廿六日午後一時頃より雨降り来る
同廿七日午後一時頃より雨降り来る
同廿八日午後一時頃より雨降り来る
同廿九日午後一時頃より雨降り来る
同三十日午後一時頃より雨降り来る
同三十一日午後一時頃より雨降り来る
同三十二日午後一時頃より雨降り来る
同三十三日午後一時頃より雨降り来る
同三十四日午後一時頃より雨降り来る
同三十五日午後一時頃より雨降り来る
同三十六日午後一時頃より雨降り来る
同三十七日午後一時頃より雨降り来る
同三十八日午後一時頃より雨降り来る
同三十九日午後一時頃より雨降り来る
同四十日午後一時頃より雨降り来る
同四十一日午後一時頃より雨降り来る
同四十二日午後一時頃より雨降り来る
同四十三日午後一時頃より雨降り来る
同四十四日午後一時頃より雨降り来る
同四十五日午後一時頃より雨降り来る
同四十六日午後一時頃より雨降り来る
同四十七日午後一時頃より雨降り来る
同四十八日午後一時頃より雨降り来る
同四十九日午後一時頃より雨降り来る
同五十日午後一時頃より雨降り来る
同五十一日午後一時頃より雨降り来る
同五十二日午後一時頃より雨降り来る
同五十三日午後一時頃より雨降り来る
同五十四日午後一時頃より雨降り来る
同五十五日午後一時頃より雨降り来る
同五十六日午後一時頃より雨降り来る
同五十七日午後一時頃より雨降り来る
同五十八日午後一時頃より雨降り来る
同五十九日午後一時頃より雨降り来る
同六十日午後一時頃より雨降り来る
同六十一日午後一時頃より雨降り来る
同六十二日午後一時頃より雨降り来る
同六十三日午後一時頃より雨降り来る
同六十四日午後一時頃より雨降り来る
同六十五日午後一時頃より雨降り来る
同六十六日午後一時頃より雨降り来る
同六十七日午後一時頃より雨降り来る
同六十八日午後一時頃より雨降り来る
同六十九日午後一時頃より雨降り来る
同七十日午後一時頃より雨降り来る
同七十一日午後一時頃より雨降り来る
同七十二日午後一時頃より雨降り来る
同七十三日午後一時頃より雨降り来る
同七十四日午後一時頃より雨降り来る
同七十五日午後一時頃より雨降り来る
同七十六日午後一時頃より雨降り来る
同七十七日午後一時頃より雨降り来る
同七十八日午後一時頃より雨降り来る
同七十九日午後一時頃より雨降り来る
同八十日午後一時頃より雨降り来る
同八十一日午後一時頃より雨降り来る
同八十二日午後一時頃より雨降り来る
同八十三日午後一時頃より雨降り来る
同八十四日午後一時頃より雨降り来る
同八十五日午後一時頃より雨降り来る
同八十六日午後一時頃より雨降り来る
同八十七日午後一時頃より雨降り来る
同八十八日午後一時頃より雨降り来る
同八十九日午後一時頃より雨降り来る
同九十日午後一時頃より雨降り来る
同九十一日午後一時頃より雨降り来る
同九十二日午後一時頃より雨降り来る
同九十三日午後一時頃より雨降り来る
同九十四日午後一時頃より雨降り来る
同九十五日午後一時頃より雨降り来る
同九十六日午後一時頃より雨降り来る
同九十七日午後一時頃より雨降り来る
同九十八日午後一時頃より雨降り来る
同九十九日午後一時頃より雨降り来る
同百日午後一時頃より雨降り来る

長野縣下水内郡地方事務所之印
証

長野縣下水内郡地方事務所之印

そもそも家毎に門口に三ツ目かごをかゝげる事は、
又前川郡地方にのみ限らず、
回かばちゃんせひやく家のうまで向けるよーに
ゆくと家のあるみそんにらみやく
ゆくようのこわ外のるまでとらんる若衆の子
ろうさば生命がうせるぞよーいく笑はわらじそさあせるぞ
達ニノヨだかせるぞよーいく笑はわらじそさあせるぞ
ゆ子火やにかたるからお綿もりめんぐそくれあか
ものちんぐはやでござるしまがうそいのそくれ

和賀川元の両屋八ツ内の
四月朔日ニ行ゆく
茶番所の地蔵堂
同
同月神の祭
同月廿日ニ両ケ所
五月廿日ニ両ケ所
二月朔日ニ
同月二日ニ新和泉所大二
四月吉日辰年祈祷所開帳
以上共古来ニ両川元の両屋
それのまわりを見せて焼後多数の人々
あります三長の由元の

古萬古屋敷
會到品中の逸品

ひるくれあるその椿繪ゑとの
蝶くとまれ茅の葉にとまれ茅の葉はつゆた娘ものに
とまろかい　とまろかい　娘ものそまるだもの
右は長崎奉行所にて編纂せし書名二百餘
の里謡の一班なり書名二百餘の後の部
例ゑて更に小冊にて奉
行事等ゑ附ありて奉
甲寅二月こゝに奉納奥部にて古萬古屋敷
ゑ見錄當箱ゑの逸利と銘もの
天明元辛丑年中秋日
朝明郡
星川邊
瑞兎

現今の萬古の
三種數

萬古燒の名品中、初代五左衛門つくりし本ゆゑ五の字銘ゑの場ゑ
ゑ附ゑ一對　五右衛門ゑ文字ゑ
現今の萬古
(一) 桑名(くわな)ゆ向　有筆ゑ
(二) 四日市ゑ　川ゑ村又ゑ
(三) 鈴鹿ゑ古　鈴鹿ゑて土ゑ燒ゑ

現今の萬古
の名

ゑ字ゑ附ゑ

萬古燒の名品中、初代五左衛門つくりし本ゆゑ五の字銘ゑの場ゑ
ゑ附ゑ一對　五右衛門ゑ文字ゑ
現今の萬古
(一) 桑名(くわな)ゆ向　有筆ゑ
(二) 四日市ゑ　川ゑ村又ゑ
(三) 鈴鹿ゑ古　鈴鹿ゑて土ゑ燒ゑ

現今の萬古
の名

ゑ字ゑ附ゑ

京ゑ萬古ゑ物ゑ屋敷

京ゑ萬古ゑ物ゑ屋敷

南無等身観音菩薩
天地和合樂
眞光圓滿樂
師檀和合樂

天母

今泉村の古寺古城の古井の傍に古き焼し燭臺と茶碗の破片

前に高古城の址あり城壁あとあり濠あとあり今泉村は此前の城下にあり

古寺あり十五社あり

茶碗のかけらを拾ふ

ねこめえ姫

井戸の古さ二尺の巣の石にて三方を囲む

少しくぼみある石井戸とぞいふ

寶筐印塔の笠の石の梅の花の下

梅の花古くあり

古城の址

同前の井戸の古さ二尺の巣の石にて三方を囲むとの注

寶筐印塔の笠の石の梅の花の注

姫の墓と

雪山寺と

朝鮮語の山ノ

朝鮮語の山ノポルと

長谷川三馬農家の大杉を見る注

長谷川三馬の事

我農家に大木の名ありそこへ行きて見てきて

年の頃まで

一日の事

来られ

百石大木七郎高之墓
[illegible]
大木八郎十郎
大木八郎十郎
[illegible]
[illegible]
[illegible]

保存しあり

長洲奈多浦の女島古墳に言せず

臓が城山のトンネル題字 岡橋氏に拠る 氏の深慮暴利なりし 馬車会

三拝従霊而已と続きて二拝従に在りと
大正三年三月 石坂氏に従ひて此辺を巡見し国東の
古に誘はれ 長洲方面にて奈多浦の女島古墳いふを
一見せず稍遺憾なりしも 長洲より帰途三浦にて一寸みる
事を得たるは 全村天平の盛時の盛況なりしも
あり
臓に城山よりクシキへ到る鉄路布設に城山のトンネルの
石門へ刻し題字は南郷の書にて敬天愛人の四字
なりしは 三重縣の岡橋氏の揮書の物一寸馬車内
一寸望見せり 三重縣の此の深慮の暴利なりし 不思議
題となる営業 ありしにも あらず なりし と云ふ
あらず此の如きに至りしと 馬車の乗りたりしが

大正三年三月 宇佐美術展覧会 石坂氏古写経に就て講演大意

大正三年三月 宇佐美術展覧会に於て 石坂氏の古写
経の講演せらる 其要を記して 古写経に就て
語る 之れ 当時の講演の大意にて 美術と
所謂
古写経を陳列せるは 古くして三念経これなり 東大寺の経堂
は かの有名なる奈良の七大寺 大安寺 薬師寺 法隆寺 興福寺 其
経蔵は一切経あり 古写経も多くありしなり
斯くの如き 石山寺これ東大寺の東寺大部経 云ふ
天平時代 年號ある古きは 和銅の大般若経 之に
國定に 天武天皇の時之
歳次丙戌年五月河内国志貴の経 持統天皇の時と云ふ 最古

のものの
智識経功徳経にみえる解次分と題する写経
の為に浪費せむ事入れ知識と
称せり當好
写経にあらわれる写経
写経司にその長もう
試みに写経生の名前をあげて
勘経せさせます
勘師 墨書にて書かれる
経師 写経する
狂生 狂生の経の字は抜き書きの
紙を継ぐ文の線にかかる
墨師 墨にその名を写経生の
本経とある文字を消せる
大寺等の本経あるを
其名故仏像と同じく尊敬
されいるもの
写経用の紙
波和恵紙 葉書
麻紙色紙 薫紙 細美恵紙
これあるいずれ
四年紙の紙も文字の
唐長麻紙とて縦目の長

昭陽のあ印

かまぐこふ印

羽人塚の碑文

[illegible]
[illegible]
[illegible]

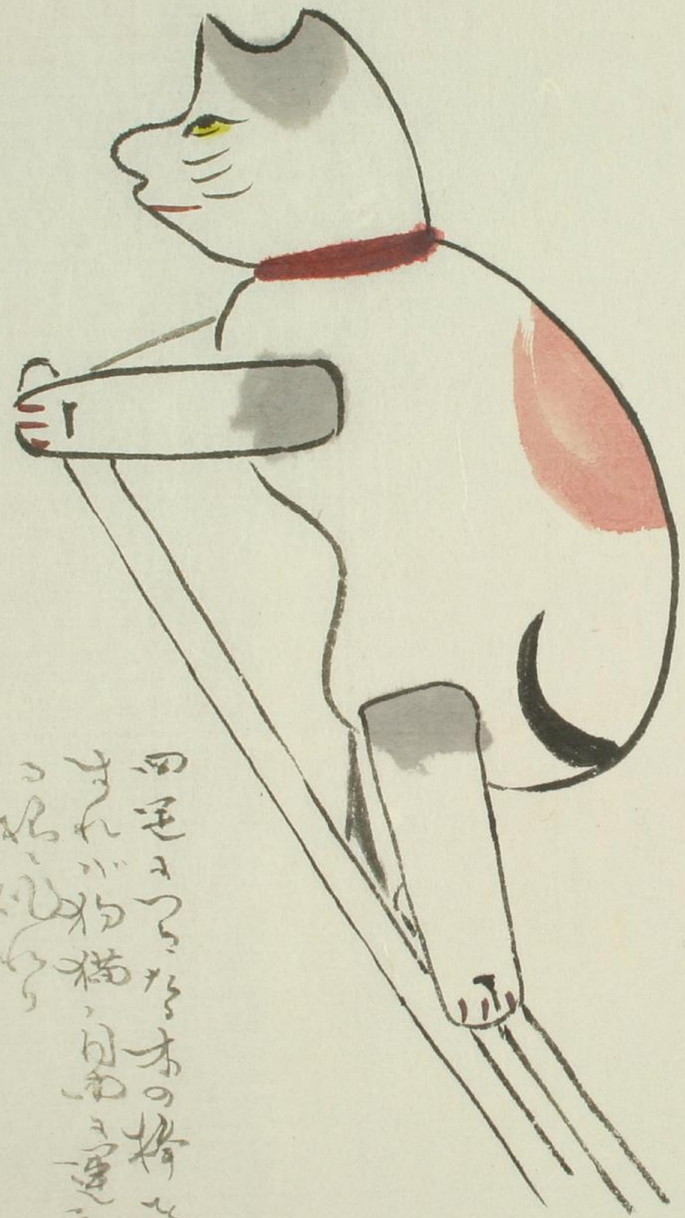
西國四国霊場は言伝十七年の年
號あり同寺本堂前庭に明暦丁酉孟春十九日
建立の一石碑あり其の文を左に
抜萃記録す聖恵寺境内に
一面成名と刻しある又
四里北にうろと刻し
大石碑あり 四国霊場 と
四百年五年三月 祖天下を黒布施 と
りて理智光 の如と云ふ 諸々 と
四百年すなわち この碑 天下の人で
すお弘名をよろこぶ あるこれのでこんなものが
と弘れんでいる天下の人という高句

京傳の印影
千萬の印影
紋聲に捺せし木村
印影

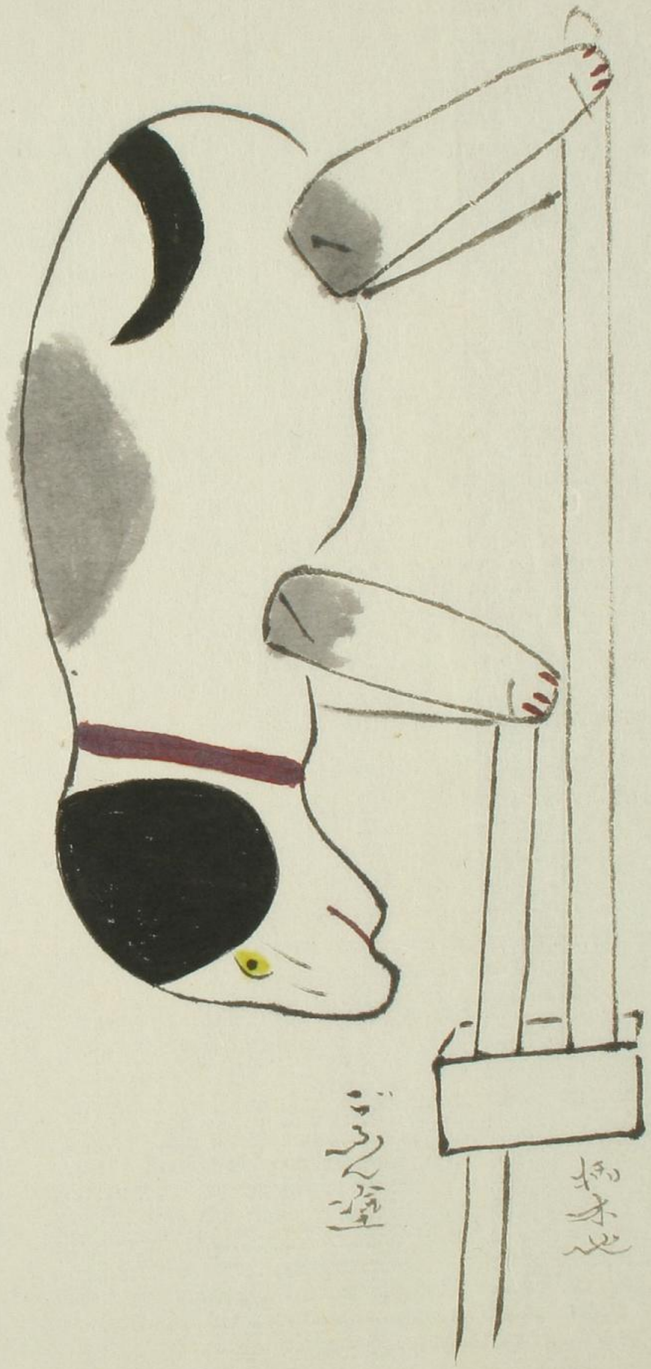
京傳の印
鈕 銅色所黒絲卸中ニ
見ル
モノニ似
ヨリ

君萬歳

理木村ノ
墨堂ノ
印ノ
事ニ
ヨリ



四足さつてる木の猫も二本
まれば猫猫、見ると逆立
ねこねこ



肥前長崎の元結屋未醒猫と猫

ごふん堂

木の心

筑後芳雪の蛙の鷺

筑後芳雪羽加子年材大こ名ま二ま二ま二

玉川秋牧四景之帆掛船

鶴吉嘯風
茶店夕照
土手落雁
機関帰帆
漁村秋月
神社晩鐘
寺院晩雨
屋蓑雪

山下八景

山下行人北又
吾妻橋利錢如
留雲茶釜夢自楽
夕陽斜下葦簀外
衣裁京染是何処
羽衣年高七両半
機関一覗直三銭
相見先乃不知代
秋風吹送琵琶語
名月千金人二百
燕帰青切礼宮明
忽有晩鐘聞仏寺
花水堆流満石隈
機声忽断店奥去
下戸建倉両廻廊
寒餅引如二文有

一杯吸出煮花香
遍照近辺名代娘
先入土手場
自似雁金不乱行
曼里紅毛在目前
漫々海上帆船遠
階子攀登漸橋時
一刻惜今宵
客去二階子不鳴
誰家観文看経声
庭中几面治維新
而機独話河端来
並屋両座夕陽暉
如雪線路新蕎麦

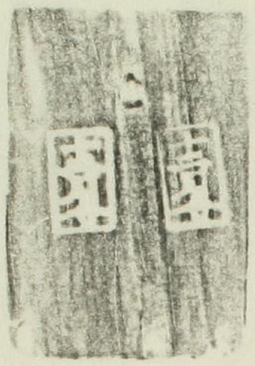
右の如き歌あり手習子のうたひ
しなるべし扨又玉川の上手
にて当りし矢びらを鏑と言
訓を教ゆ此鏑とをしへ
筆蔓自是と言ものにて
近辺名代娘
土手場清花の
機関ちがからくり和蘭陀
寺餅引如二文有、三文とう五文有

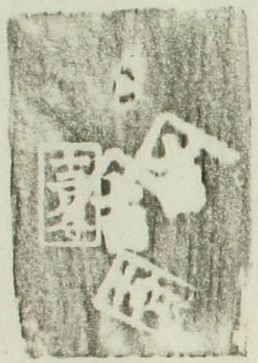
娘先入
雁金
娘のそよ
はめそ
遍照
娘あり
娘先入
雁金
娘のそよ
はめそ
遍照
娘あり

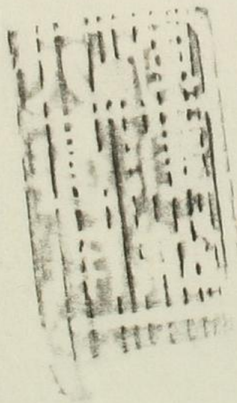
新義真言寺の鐘を撞き初め

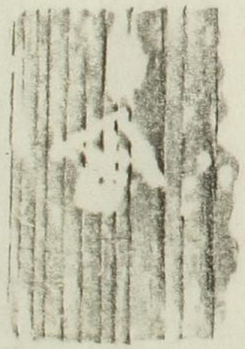
江戸初の時の鐘

行誠上人の歌



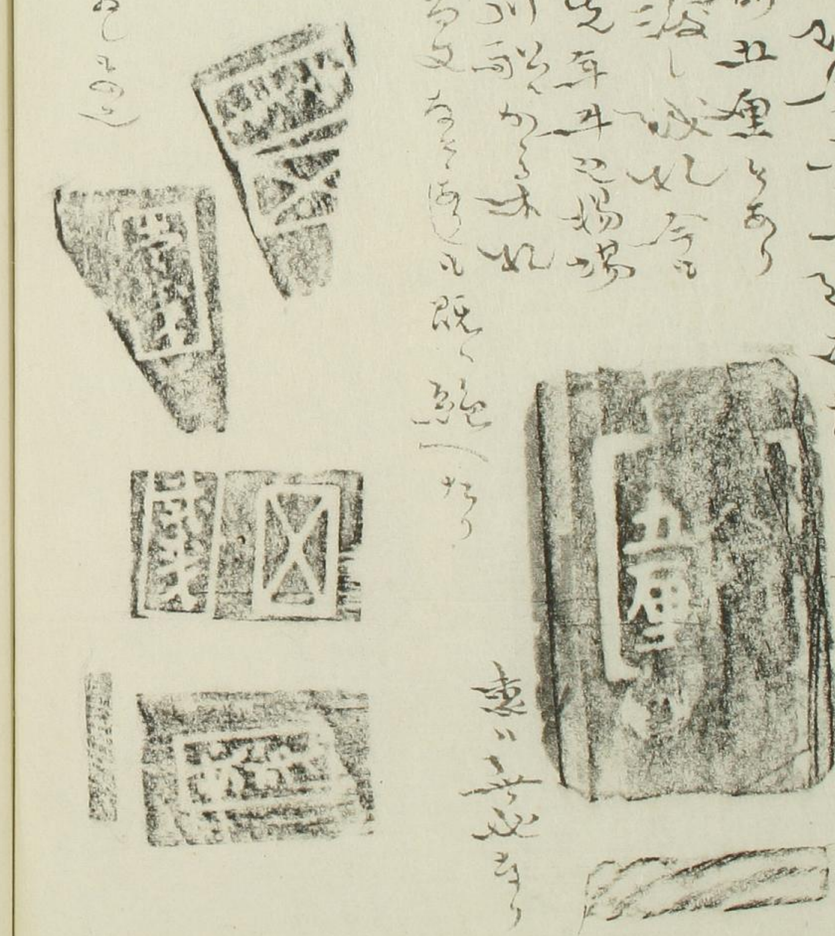






淀川上流入澤渡船の絵

現今の



烏岡廟の図

武蔵国中六社一社也また岡
廟を書る岡廟に墨なりからも及恵の文字ハ
紙もあて掃影也故
ゑがしてハ岡
のかたちせもせし
ものにて
ゑて好
るふ
古社の
ものこ

サウデ米

ゐの中かの白屋考
いあへぬまち一面
の石堀

ゐの中かの十五号の伝
屋ありこれ梶川与惣
梶川の母と娘
のみ

黒方ゑ珠く火を献
とく神祝い始る
さなり立
とあるこれ俗のなれ米
ゐの中かの十五号の伝
屋ありこれ梶川与惣
梶川の母と娘
のみ

薗浦まで

嵯峨御用
天保七申年四月
印鑑
海苔屋 中村七兵衛

迎エカシ立村の
花の木

刷毛序といふ説の起り三説あり

刷毛序(ハケツイデ)といふ説あり何事かなすその節りに尚すゞく
ちかは刷毛つゞきといふ語を取るが刷毛序と書くのは
茶讃あるしかを光れば糊二羽などの墨刷毛を用ひて画
がくもののちすゞまる一筆にあくべきとて刷毛序の
諸家をひらしか文ハ画工刷毛を用ゐて歌舞伎草体画を書くれば
刷毛を用ゐるつゞきを画くハ相当也刷毛つゞきの文をば起
りしか行はれてしたる絵画よりもをかるが文光るくに
前にも清書せし高尚なる者の手よくなまずしと
あり是く書掛しといふこともハケルといふ也或る物置
清書す時の多のかきたるに添へて書掛く序にこれも
加へ書入れとなる也ハケつゞきといふにやあらん平行生[illegible]

高燈籠

の是とす猶又何の俚言集覧なとに一説の説あり
をうる器にあるはこれ京の四賢に行なく
又光る延一説に経師屋の糊刷毛を使用する序なる由
を端ゑるとのことでのりつゞきといふ同じと
思ふるは画工の三つハケツイデといふことよりも何れよりか
糊序の言葉より起りしならんか
七月の高燈籠ともすることは昔より之ある所
田舎の家々にて揚げて名高かりしが維新後東京
には絶たり近在其地方にては今に[illegible]
[illegible]

鏡研の新始まる店

武蔵国分寺の瓦製造の地と云ふ

梅ヶ名の意味

とうたい始筆をつけたといひしとぞ五ツの峰の音が鳴る
と迷霊脇からとふ（一銖の百七十二に記し燈の下に置いて日録を見る）
始めに両替銀行の前に石あり一名は鏡研の古名
始あると石井家所に云ふ如く
武蔵国分寺の瓦の製造場と云ふ説ある地に有名に
野牛村カワラガヤトと云ふ地は布目瓦が多くある
田端村と云ふ所に出土して…大正三年…
昭和に云ふ…
府下淀橋に湯屋あり梅ヶ名と称し家紋菊
水ちつけると正成の縁りある家系を示す古書
…と東大久保の茶商…

伊豆大島の民謡 及 土佐方言集

（別題）伊豆大島の民謡

男なら乱ヶ崎沖の潮の早いのを乗せて見よ
乱ヶ崎沖まで見送りましょうが其から先ならば神頼み

（気候に関する俗謡）

正月の年の恵方し
三月潮ならひ夕ごち　三月西
四月しぐれ　卯月ならひ　夫を婦が舟にのる
五月しぐれ　五月ならひ　海の中に家を作る
七月盆ならし　　灘の先に船をつなぐ
八月の風は霧起し　　七月凪　五月凪
九十月の空下り十日行って一日西　　十月凪
霜月ならばに西が吹く
祝子七五三の祝に唱ふ月お鳥目のとこなうた

月お度さめは芋の種葉も煮うく茎もてがく子供あまたに
月お度さめは御飯御朝おちす晩には芋煮ころみ来ら
月お次さめは御盛おより竹節引は、船は十七
婚姻の行粧うわ此のうわのおうち
東金の長おうが嫁や何所から
やおうさアから、さアも本卿の茶屋の小娘
長持七さま 葛籠八つづらいつづらで腰も抜けるさ
お雨盛り
(東金) (金)
(角黒) (髭黒)
角黒髭は誰が買ってくれた
嫁すよ本見て受けろ、中にや悪治のうがめる。

一貫そまるめて秩父へつれて、忍ぶ君妻に持たせたい、
ジャシ柳に通して
釣を持てまいて盃洗て
赤も忍れの盃がのさ、祝も言いように来がさで、
赤も忍れの盃がのさ、祝も言いように祝様でい。
そうでもないお日お度い。

次の御謡い謡うが等がありました
(鹿島) (卵)
祝い日お度の高砂
千早振さ、天の岩戸も押し開き御代を奏して舞え鶴亀、
(吾唄)
祝い日お度の高砂よ松もイヨコノ松も栄のう葉ぶ茂さ、
五人子拭い白髭
松めもイヨコノ梅も栄めうが中

綾子お祝ひの座の美しさよ、

（サンガツ）
「三月に、三座の雛にかざしつゝ、
「美しや桜牡丹の三重ね、
「女雛と王雛の本木の雛、
（カシテヨコ第）
「カシテヨコ第、向ふから、
「長い煙管で長ふかす、
（ガッシヤガシヤ）
「松の葛籠見たような桜、
「つゐた桜にもぜひつなぐ、
（今のテモ）
「今の子も座のさくら、主にせめんて乳は紅梅、
「散（もし）待て今年の歳、明さ三月いる嫁御、
「抱頭せうとも顔き、そんば、わしがいはすみだ川、

「主を待ち、
「主を待ち〳〵川日とゞめん、雪が降くまるぢややう、
「歌まで一ばい床なら、でも主が恋となるやや月に白かの、
赤とんぼ
「書いて赤蜻蛉の片羽根、
「思と森らかや主石あるか、
（ヤヤヨヤヨリ）
「姉ねゝや紫媛ひりや紅よう色でしや揚げれこのからだ、
「恥話が言じて別甲と別甲、
「連れて行から髪の通せ島田で世をが渡らりよか、
（ニガテさし）
「頂て通るに阿波もて急お常に向く聲高れよか、
「常に向く聲高れよかゞ、
「紀の意見で籠高れよかゞ、

「義のゐでも実あらちさがぶ
「鏡山松もみ世間の人にづや
詠人 五らん
出羽の祝ひ其ぬい一枚
伊豆の下のから朝山出はだ
かい和船れば甲賀一寄ずと
船頭 鳴山
「日和山からちるれ
「面を貴そう好物
「角かお前お放ものせば
「今度参りに何々積みやる、芸者も来積みやる
「はがち申からゐ帆がつれる、あれやとんだと思ふたれば、
「きいの印物なのか
「モチト悦さけて此せる
清盛公
「清盛公の子本松は謝れが植めた
清盛公の子本松は誰れが植めたやら皆も植めた松ぞら、
「彩に造りし宿けたり見れば中の歌の浮きすがた、
「柱からかね新そで黄金水縄子縄は琴の子、
七福神
「鳴の始めは大黒始め利鳴つまんで都よ袖も玄根に
「ときり島和さあけれと弁指島さんまん奈良柏夜りタて

又反子摘みに来て日ぐらし三もと
（鴨鳴）
鴨鳴の色鶏に出でそうれよ細の勢衆に
のもろ前さ色よも秋がすく
（向伏前場歌）
向伏前場さ荒れ嫁で静か、風がなってもこいろ知れ
向伏積場（遇）て摘んで
そうもしや来のし
帆で向かうまで、西の一番に錨やりて、かこの美衆は
（摘み節）
身はそこ思ひし思はあの通に あまの狗子毛こがんし
差来ぬ行き来る甲に契りはなけの露のかなさけ
行くも敢又行く来るなんば 空行く雲の定めなさその
向潟の磯辺のいに寝ぬ抱けて 波は七つうも謎にそだこば
又唱第一名野増節
（前元の一節を思うそのものんで大唱第一同者のそれ次の情なるく示すもの）
雁がれから来いとの手紙行かづやなるまい 空行く雲の定めなさその
わしや又唱お外出て日和都合で差るもの多い頃も頃る頃は縄えやせぬ
来てはとんと面ア出さぬ露までも
忍ぶのいやの茶釜のふたこぼすな露までも
月のかんく冴さしんく夜さ雁も早一がさの男い
行つたか雨つれか難にだも女房ひろり
わしア行くなら言ね頼むまめて居るかと云てかくれ

「つじ椿はかふを照らす船のみふねは灘照らす

「われ一丈大島荒海をだちゃ色の[illegible]には親めづり

「波浪と添木一里の違ひ文郎と旦那は三つ違ひ

「錨を起こえて帆を巻くうはしんから涙ぐまるとある

「相様灘をは妻子にあかす可愛い旦那子のふところうちは

「行て来ひやいさんごの山へせめて十日も居たらおもい

「波浪を潮巻けやかすかな見えるも遠くなる船なつかしい

「男盛なら乱ヶ崎沖の潮の男この止めて見よ

「潮の男ははとめれば止まる恋て止まらぬ恋の道

「波浪のこだかの瀬はさかさ重りても重と云ふたる面をまるい

以上六三首七月[illegible]日[illegible]大島[illegible]所載[illegible]の[illegible]君

大島の若者で一切の婚姻[illegible]せられぬ[illegible]

其さんの一路の旅をの男前瀬をこえし[illegible]

其[illegible]の若い其風習を存すに[illegible]

他の男なんが悪風と思ふことを[illegible]

行しもこなたを[illegible]以下[illegible]

こゝに風習中のことを略す

大島の婚[illegible]七年より[illegible]君に剝らず[illegible]

春の[illegible]を[illegible]大島の[illegible]

嫁者[illegible]その[illegible]

ましてインボンジリ未婚者は[illegible]

甲大き[illegible]折り[illegible]細組で[illegible]

夫婦[illegible]荊枝の先の[illegible]

酢の物（大根）甘酒等の性部
古風に西経又は二の鏡餅を
命名 ……名目を初め多く自己の
名（家の名 地名等を冠して
デンキュウ 傳吉の子の名吉の略
工條（ミカド）ギチ（家の名）の吉の略
兎 ヒチ（兎（あだ名）の七ちゃの略
サつマサ 澤（地名）のお秋の意
カンショノオアヒ 都新（地名）の
オマツゲイノオユウ お松の家のお客の意
任ぬ花弁に著しく「フノリ」「右衛門太郎」「フントリ四郎太郎」等の意味（ありと）

發音特徴

一語音でなる場合には加行を以て發音す

一名詞の下には「コ」を附ける

猫（ネカ、ツコ） 桶（オヘ、ッコ） 兎（ウサギ、ッコ） 子供（コッコ）

一音の終りが「ン」である場合「ン」を發音すること

北物（バヘモン） 着物（キモン） 干物（ヒモン）

一濁音の連行を多行に發音すること

座敷（ダシキ） 善悪（デンアク） 山岡が甘し

一野獣では（バ）と（ウ）とを特別して發音す

梅（バニ） 番地（ワンチ） 八個（コドウ）

一善光地では音の終りを母音が来るかの二の子音として發音す

螺螄（サザー）暑い（タツー）懐中時計（カーツードケー）
一両村にそる スセツヌ其他のもの ミエ、ミエ、チエ、等の物をとる時例す
水（ミヂユ）煉乳（レンター）秋（シユギ）背中（ミエナハ）
一服に御座も迎ふす（ナー）（ヨー）（テー）等の助辞を加へ完結
或は草を迎ふ等ヨかさ（野道）
ヤマヘイツタナー 山へ行つたか
ドホヘイツタヨー 何処へ行つたか
ソウダノー 左様でのございます
マメメーン 迎ひ迎ひや 国物を迎ひ
甚麼者もり 壮健です
カキタナー 家内家族的まで挨拶等
（クツタナー）（ユフツタナー）（カマイツメナー）
せ附きたもつこと等皆な意味不通来歟歟が考へからなもつ
もの中せり
方言の一班 グレル（贈ぐ） ハンダイ（飯椀） ミヨベツタリ（常に）
ライセン（茶碗） ホクシヨウ（無口） カサシイ（病気） ミヨウガ
ヨリ（乞ふ）とるのは自己もつ物 シンダ（死んだ） コニウ（男の子） 岡（丘）で
婚姻 婚約をなして女は初めて其家の家族一同と交際し物を見て結婚成
して女は初めて其家の家族一同と交際し物を見て結婚成
迎への式を挙ぐ 迎へとかむこれを聟にするをもつて聟入にするをもつて婚約とする

祭典の日なり、その日より「御子」で始めて鹿子で終る」として毎年一月十五日より八九日の間が女遊して箇様な事をなすと云ふ。
縞と茶みじん縞の重ねに黒の角帯、同足袋に黒鼻緒の下駄をはき十二七からず三十三位迄の若き者赤い友禅の襦袢の袖を覗かれる位の銭の数を懐にして三人宛一組となりて御子の御いで鹿子御いでと謂ひつゝ家々を廻りて歩くのである。
本山總鎮守として三原山を祭り、毎年二月の山祭りと称して祭典、近年大山祇命と改称せり。
この外大山祇命と称する祠は郡内に多く、殊に郡佐和気郷村に多し。

御宮神社　祠祀古事記
若谷神社　祠祀三原明神、若しくは薗王子権現と称す。
前記の
外の重なるもの
大宮神社　野増村　郷社
波濤神社　波濤港村　村社
波治加麻神社　波治加麻村　若宮
若谷神社　若谷村　若宮
八幡神社　元村　村社
春日神社　岡田村　若宮
差木地神社　差木地村　若宮
若宮　祭神　豊玉命　合祭
菜島　祭神　神武天皇　元村
元村　日蓮
福寿庵　岡田村　真言宗薗洞

大日本史列伝
凡例

[illegible]
[illegible]
[illegible]

奈良県立図書情報館所蔵

礼義志
愈賀志
歸奉志
次第志　已上三年

此二誦士もく嬉當して
考九しるす
武蔵玉川善明寺ハ迎之年両の六面塔あり一人のもの
の七考なり
もし此経巻末にるよう
求るものもって大正三年七月の書目にて像二百面
と称するもの及ぶ書る者のしと

青玉延千
川の忌懸
豊田亮
畠田亮

大乗大方等日蔵経　二巻
自爾時而年　至應安元年解制　已前
此二十巻者巻末には
願主比丘光信同願比丘
大乗方等大集日蔵経　二巻　十巻

大方等大集経　二巻
此三十巻のうち前巻
同武州玉川郡
工鐫版刊行
刻永享年両号補
也仍發心募衆而刊行之憑茲善利法界衆生同圓種智
月　日　化主比丘光信謹識
武州玉川郡　善福禅寺

三十巻

大方等大集経　二巻　自應安甲寅至至德丙寅
巻末に
山善福禅寺化主光信募衆緣名
第十五十七十八十九二十の二巻を為未
刻永享年両号補
也仍發心募衆而刊行之憑茲善利法界衆生同圓種智
月　日　化主比丘光信謹識
武州玉川郡　善福禅寺

以二十巻毎巻末に　自應安戊申　至永徳壬戌
五先信同勅比丘光由募集刊行

摩訶般若波羅蜜經　二十巻
以二三十巻の内ち　自明一巻　至第二十巻
第二年　至應安七年甲寅
一巻至三十巻為末刊　永享五年癸酉写補

大般涅槃經　八巻　四十巻
自第一巻至第四十巻　末刊　永享年中写之

大方廣佛華嚴經　卅巻　四十二、巻
以二四十二、巻内世一巻　為巻末に　自嘉
至應安七年甲寅武州　藝陽神奈川　稱名寺比丘　光信　祖榮誌之刊行

大方廣佛華嚴經　卅巻　巻末に

以二十巻毎巻末に　自應安戊申　至永徳壬戌
五先信同勅比丘光由募集刊行

摩訶般若波羅蜜經　二十巻
以二三十巻の内ち　自明一巻　至第二十巻
第二年　至應安七年甲寅
一巻至三十巻為末刊　永享五年癸酉写補

大般涅槃經　八巻　四十巻
自第一巻至第四十巻　末刊　永享年中写之

大方廣佛華嚴經　卅巻　四十二、巻
以二四十二、巻内世一巻　為巻末に　自嘉
至應安七年甲寅武州　藝陽神奈川　稱名寺比丘　光信　祖榮誌之刊行

大方廣佛華嚴經　卅巻　巻末に

海東武陽芯蕊光信
謹募衆縁命工鋳版
但願善利報資恩有
法界含情同圓種智
應安第七　第節誌之

合巻末に　奉納　鶴岡八幡宮寺
永享五年癸酉三月二十三日
千時總奉行　前陸奥守憲直

毎巻前に
鶴岡八幡宮寺
黒印押捺す

以二大乗経四十二巻　鎌倉鶴岡八幡宮寺
御寄進之善願寺之一箱ニ
奉安置之物也

共古日錄 廿四

共古日錄之二十四
明治三十二年八月十五日

唐龍山李石樵續博物志卷之三

禽類解詁云芸蒿似邪蒿可食魚紫典琴云芸香辟蠹魚蠹故藏書辟芸草能魚之海人取之富田寛翁云

芸香ハ香草ニシテ能ク蠹魚ヲ除ケルヲ以テ書ニ入ルヽモノヽ如シ

食用ニナラヌモノヽ思ヒ禽類解詁ノ芸蒿トアルモ同一ノモノヽ如シ